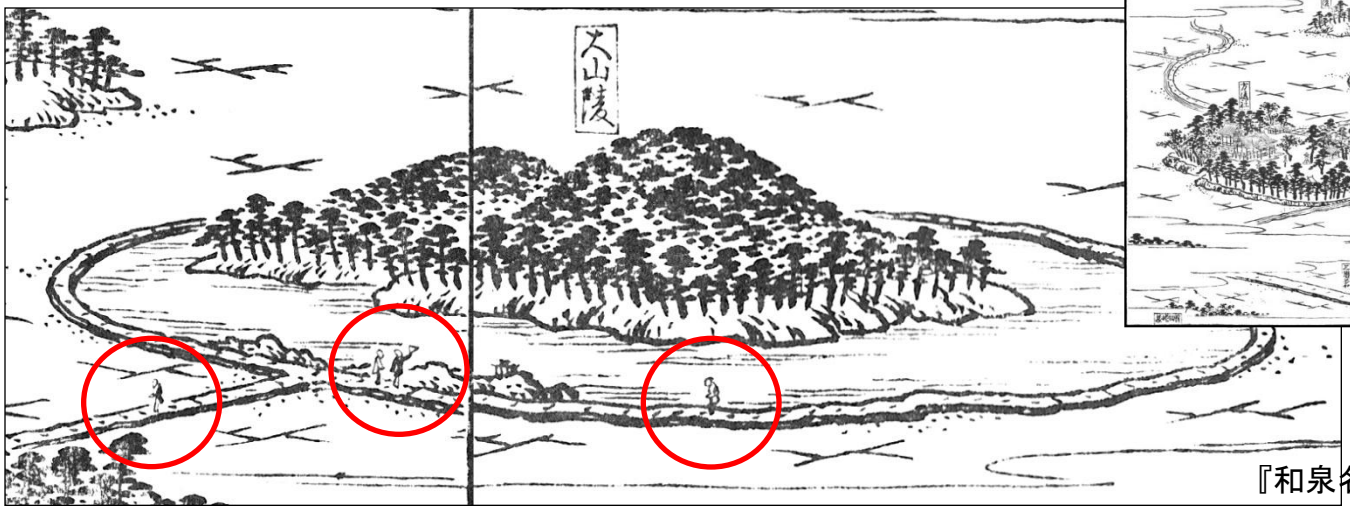
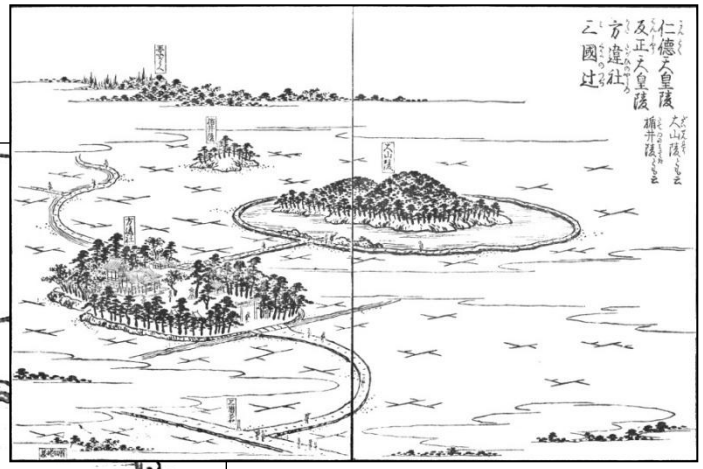
百舌鳥古墳群の周遊にみる歴史的風致

百舌鳥古墳群は、江戸時代になり「堺鑑」において、被葬者や古墳の大きさについて紹介されるようになる。「和泉名所図会」の挿絵には、濠の周囲を巡る道から人々が見物する様子が描かれており、その大きさを体感していた様子がわかる。

また、江戸時代にも、百舌鳥古墳群は次のように短歌にも詠まれている。

「山とのみ見ゆるもす野のみささぎに
高津の宮の昔をそおもふ」（契沖）



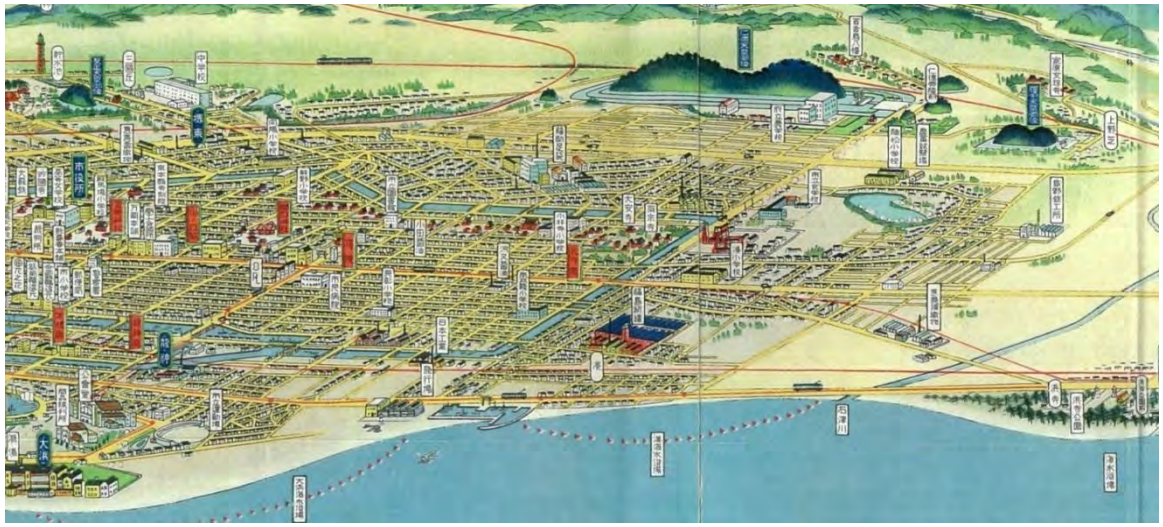


『和泉名所図会』にみる仁徳天皇陵古墳
寛政8年（1796）

百舌鳥古墳群の周遊にみる歴史的風致

近代には、各種案内や鳥瞰図において、仁徳天皇陵古墳、反正天皇陵古墳、履中天皇陵古墳の三陵を名所として記載するようになり、古墳群周遊が広く一般的に行われるようになった。

また、鉄道や道路の整備が進められた。大正13年（1924）には、仁徳天皇陵南側の御陵道を整備している。その際には、堺、泉北郡の青年団他の勤労奉仕や、堺市民有志の寄付による桜や松の植樹が行われた。



「堺市」（吉田初三郎　画）　昭和10年（1935）

御陵通

百舌鳥古墳群の周遊にみる歴史的風致

百舌鳥古墳群の周遊は、圧倒的な古墳のスケールや、群をなす景観が訪れる多くの人に感動を与えており、全国から年間13万人もの人々が訪れている。

この周遊が、近世より良好な環境が維持できている背景には、地域住民による活動が密接に関係する。現在も、仁徳天皇陵古墳などの濠および周辺の清掃活動、ボランティアによる案内が行われている。

このように、百舌鳥古墳群の周遊は、古墳という巨大な建造物を体感し古代に思いをはせる来訪者と、古墳を守り良好な環境を維持・向上することで来訪を受け入れる住民が生み出す、堺市独自の活動といえる。

清掃活動

ボランティアによる案内

◆歴史的風致の価値◆

■百舌鳥古墳群の周遊にみる歴史的風致

・日本書紀に記される地名が現在まで生き続ける伝統ある地域

・全国有数の規模を誇る巨大な古墳が群をなす圧倒的な存在感

・江戸時代の短歌に詠まれるほど、豊かな情景

・今も誇りを持って守り継がれる存在

↓

〇古から現在まで日本各地から数え切れないほど多くの人々が訪れる
〇世界に誇る歴史とスケール、多様性を兼ね備えた古墳群を体感することができる

伝統行事・祭礼にみる歴史的風致

■百舌鳥八幡宮秋祭り「月見祭」

百舌鳥八幡宮月見祭は、「宵宮、当日、後宴」と言われ、旧暦8月15日の中秋の名月とその前夜、3日目の相撲大会という日程であった。後に相撲大会がなくなり、現在では仲秋の名月に近い土、日曜日に開催している。豊作祈願と満月を祝う風習とが合わさって神社の祭りになったものとされている。

ふとん太鼓は、太鼓を仕込んだ台の上に朱色の座布団を5段重ねにした造りで、高さ約4メートル、重さ約3トン。約70人で担ぎ、「ベーラベーラベラショッショイ」という独特のかけ声と太鼓の音に合わせまちを練り歩いた後、神社に奉納される。現在、ふとん太鼓は氏子9町より奉納される。

このお祭りをみるために2日間で延べ15万人が訪れ、その勇壮な姿と沸き立つ熱気に圧倒される。

百舌鳥八幡宮

百舌鳥八幡宮秋祭り「月見祭」

伝統行事・祭礼にみる歴史的風致

■百舌鳥精進

百舌鳥精進の風習は、正月に身を清め、心を真にして精進潔斎するというもので、百舌鳥八幡宮の宮司をはじめとして、百舌鳥八幡宮の氏子の間で地域をあげて続けられている。

髙林家では、年末にすす払いをし、もちつきをしてから精進に入る。大晦日の夕方に3日分のお雑煮を炊く。料理は肉や魚を絶ち、出汁も昆布を使用する。元旦の朝には、男性が雨戸を開け、灯明をともし、線香をあげてお参りをする。その後、お雑煮を神仏にお供えする。食事は、全員でお膳を囲み3日の間続けられる。1月3日の夜は「精進あげ」として魚と鳥を食べるが、小正月の15日までは、豚や牛などの四足の動物の肉を絶っている。

近年は実施しない家もあるが、期間を短縮して元日だけ精進潔斎をするなど、住民が方法を変えながらも、正月の伝統行事を今もなお大切に守り継がれている。

髙林家住宅

百舌鳥精進